英　語

１．現役と浪人の英語力の差はどこにあるか

①文法・構文の知識量にはあまり差がない

差があるのは、文法・構文知識の運用力、つまり、実際にそれらを長文に適用して文構造を捉える力と語彙力、そしてそれを生かして長文をどれだけ読み込んだか、である。

②学習の範囲と方法に差がある

現役生は基本的に「試験範囲」が決まっていて、その範囲でどれだけ内容を理解･記憶するかが勉強の中心になる。浪人生は「試験範囲」がないため、長文などの内容を覚え込んでも始まらない。個々の長文から「いつでもどこでも使える知識」を血肉化することが勉強の中心になる。

③入試に対する「戦略と戦術」に差がある

受験校の出題傾向に対して、大問ごとの時間の配分を考えたり、問題を解く順番を見極めたりすることの重要性の認識と、それを意識した問題の演習量に差がある。

④記述解答作成の丁寧さに差がある

和訳や内容説明問題、英作文等の記述問題に対し、採点ポイントを意識した、点数をもらえる解答の書き方を心掛けているかどうかに差がある。

２．大学入試英語の現状

①読解問題の長文化

全問題に占める読解問題の出題割合は国公立大学では７割を越えており、私立大学でも６割弱を占める。文章自体も以前に比べ、国公立大、私立大とも、長文化している。この長文を正確に読む力を養い、文章の内容を正確に把握する力を身につけることが、合格に直結する。

②口語表現、実用表現、日常会話文の重視

北海道大・東北大などをはじめとして、読解･作文を問わず、素材として会話文（それもけっこう「本格的」な会話文）を採用する大学が数としては多くないがある。会話文だからといって特別な読み方が必要なわけではないが、電話応答や買物といった特定の状況における「決まり文句」や基本動詞から成る口語的なイディオムなどは整理しておきたい。

③英文コミュニケーション能力の重視

必ずしも高度な「和文英訳」ではなくて、簡単な英文で自分の意見や与えられた状況などをきちんと伝達できるかどうかを試す大学が増えてきている。自由英作文の出題増加がこれを物語っている。ライティングの教科書をしっかりマスターし、確実に書ける英文のストックを充実させることが重要。

④音声面（リスニング等）の重視

センター試験は50点、リスニングを課している大学でも配点比率は高い。軽視すべきではない。市販のＣＤ付きヒアリング教材やラジオ･テレビの英語講座（２ヶ国語放送も利用できる）等を活用して、聞き取りの練習を日頃からやっておく必要がある。

３．受験のための英語学習の基本

①文法の基本を早期に固めること

まずは、教科書レベルの文法問題集（イ）を１冊仕上げる。それが終わったら、文法・語法の所謂「頻出」問題集（ロ）をやって知識の洗練と定着を図る。

ただし、これは（イ）の定型問題が全部解けるくらいの実力がついてからでないと、ただの断片知識となって効果は激減する。

更に、（ロ）の徹底とともに、実戦問題集（ハ）を入試直前までやり続ける。センター･私大ともに過去問の演習は必須。実際の入試で選択肢の中から正解をスピーディに選び出すには、

（イ）での全般的理解 ⇒ （ロ）での絞り込みと定着 ⇒ （ハ）での知識の洗練

のステップが必要。

②単語・熟語の覚え込みを徹底的にやること。

徹底して辞書を引き、派生語･同意語･反意語なども調べる。また、動詞については、用法をしっかり確認すること。例えばleaveなら、″leave+X+･･･″の″X+･･･″に注意する。つまり、″leave+O″ なのか ″leave+O+C″ なのか ″leave+M″ なのか、といったように精密に追求する。単語の「意味」と簡単に言うが、「意味」は実は動詞の後のこの ″+X+…″ によって決まってくることが多い。また、上記のように「意味」と「用法」を切り離すわけにはいかない単語の他に、名詞や形容詞･副詞、動詞でも目的語を″O″を一つだけ取る動詞の中には、絞られた意味さえ知っていれば対処できるものもあり、実際の長文読解を通じて出てきた単語を意識して覚えていくのが最も効率的であるが、市販の単語集等も大いに活用し、徹底的に覚え込んで行く。

□ センター試験対策

センター試験英語の総語数は選択肢も含めて5,000語以上である。80分の試験としてはかなりの分量であり、時間配分については前もって考えておかなければならない。第１問～第３問で30分、第４問･第５問で30分、第６問で20分が目安である。問題を解く順番は普通は第１問からでよい。黒本･白本の類でそれぞれの問題の所要時間を計り、時間を取られる問題とそれほどでもない問題についての見当をつけておくこと。

リスニングテストについては、英語の音に慣れる機会をコンスタントに持つことが必要。

第１問【発音・アクセント・文強勢】

模擬試験でも発音問題の出来は思ったほど良くない。つまり、意外に点差の出る問題であり、軽く見ていると１点を争う場合は不利になる。日頃から声に出して体得することを習慣にすること。発音アクセント問題に頻出する単語をまとめたものを一度は集中してこなしておくとよい。

第２問【文法・語法・応答文完成・語句整序】

問題を数多くこなすのが最も実戦的で効率の良いやり方である。文法の項目別に分かれているものを仕上げるのと並行して、実戦形式の無作為なもので基本的知識を確実に定着させて、実戦力を身に付けるようにする。

【整序作文】英文構成力に不安がある人は、実戦形式の問題集で集中的に補強し「解法のコツ」を体得しておくこと。この第２問の知識問題で、時間をロスすることなく迷わずに正解を出せなければ「時間が足りない」ということになってしまう。

第３問【対話文・不要文除去・発言の趣旨】

ただ英文を読むのではなく、代名詞の指示するものや冠詞の変化、接続詞やDiscourse Marker（つながりを示す言葉）といったものに着目して、論理関係を考えながら英文の繋がりをつかみながらそのパラグラフで述べられている内容を把握する練習を積む。

ここでの得点力が全体の高得点に直結し、またここでの所要時間短縮が後半の読解問題の得点に影響を与える。

第４・５・６問【読解】

読解の設問は内容把握に関するものがほとんど。決して易しくはない英文の長さに対する集中力の持続が求められる。読解力が不足している場合、まずその前提となる基礎知識を充実させる必要がある。さらに、積極的に読むという姿勢を持つことで内容把握力が高まってくるはずである。教科書の語彙レベルと理解力があれば十分に対応できるものなのだが、分量がかなりあるので速読力が求められている。読むスピードを上げるには、まとまった英文をある時間内で読む練習が有効である。学校の授業ですでに扱ったレッスンや訳さなくても内容がわかるような平易な読み物を、最初は時間を計りながら一気に読む練習をする。やり始めのスピードの目安は１分間で60語で、これは第６問の長文問題の本文を10分間で読むという速さになる。また、設問で問われている情報をすばやく本文からスキャンするメリハリのきいた読み方も類題演習を通じて身につけて行く。

リスニング

ＮＨＫラジオの英会話放送などを利用し、ディクテーションを行うと効果的。英検２級程度のスピード(１分間に約150 words)で聴く練習が不可欠。Would you mind ･･･? などの定型表現の習得、「道案内」「電話」「環境問題」等のテーマ別の比較的長い会話を聴き取ることも必要となる。また、時間等、数字の聞き取りに強くなっておきたい。

[類題演習のめやす]

□センター模試得点がコンスタントに180点以上→過去問＋黒本の類を10回分
□センター模試得点が140～180点で安定しない →過去問＋黒本の類を20回分
□センター模試得点が140点以下 →過去問＋黒本の類を30回分

[類題演習のやり方]

□センター模試得点がコンスタントに180点以上
→10回分すべて制限時間(80分)通りに演習。
□センター模試得点が140～180点で安定しない→過去問＋黒本の類を20回分
→10回分は大問別に演習を行い「問題に慣れる」。次に、残り10回分は制限時間(80分)通りに演習。
□センター模試得点が140点以下
→15回分の大問別演習を先に行い「問題に慣れる」。その際、間違えた問題、理解できないものについては徹底的に調べる。次に、残り15回分を制限時間内で演習する。

□ 国公立大２次試験対策

□ 東京大英語［前期］

東大の問題は難問であり、しかも、多彩な設問に手際よく対応し情報を処理しなければならない。手早く考えをまとめ、ミスなく解答を作らなければならない。そのためにはやはり受験常識的な英語学習に加え、過去問の設問別研究が非常に重要となる。

① リスニングの基本的な勉強法はディクテーション（読まれる英文を聞いて書き取る）である。これによって「英文をかたまりで一度で聞き取れる」度合いが高まる。評論文の聞き取りは、ラジオ・テレビの英会話番組に加えて衛星放送の副音声でニュースなどを聞き取る訓練もしておかないと厳しい。その上で市販の CD・カセット等の教材も活用して、実際の東大の設問形式と問われるポイントをよく把握しておく（英検 2 級～準 1 級用も使える)。

② 自由作文と要約問題は答えや書き方が１つではないので、過去問をやって先生に添削してもらう。両者は出題「形式」は違うが、出題「内容」を整理して答える力を問う点で、同じである。書き殴って部分点がもらえるといった甘いものではない。要約は、「条件」「論拠」「筆者の主張」といった、現代文の読解にも必要とされる読み方を意識し、日頃から文と文、段落と段落、事例と筆者の主張、一般論と筆者の独自論といった関係をきちんと分けて英文を読むことを心がけ、さらに必ずノートに整理し要約文を書いてみることが大切。その上で専用の問題集や過去問で実戦力をつける。

③ パラグラフや文の補充問題は類題が少ないので直接の対策はやりにくいが、普通に英文を読み進むだけでなく、日頃からいわゆるパラグラフリィーディングを心がけること。指示語・冠詞・同じ名詞の反復・言い換え・接続詞などに着目して、文と文、パラグラフとパラグラフの間にはどんな関係があるかをおさえて読解していく。

④ 単語については標準的な単語集を１冊仕上げておけばよいが、意味が分かるだけでなく、英作文にも使えるような覚え方をしてほしい。

□ 京都大英語［前期］

京大の出題形式は「英文和訳」と「和文英訳」であり、凡そ東大の対極にある形式ではあるが、「どれだけ内容をとらえたか」を徹底的に問う点では同じ。筆者の観点がつかめないと適切な訳語が出てこない。和訳では、英文の「内容」がわかっていなければ、直訳しても日本語にならない部分に問題を設けてくる。英作文でも逐語訳は無理なので、やはり「内容」をいかに表現するかがポイントとなる。問題の和文を適切に読み替えて----これが難しいの

だが----自分が確実に書ける英文で表現し直し、極力近似値を狙う。和文に振り回されて、文法ミスや現実に通じない表現は避ける。

① 和訳はまず過去問（後期も使える）で問題の質をつかむ。下線訳の部分のみから訳出しようとせず、まずは段落や文全体のテーマや主旨をおさえその中に自然に収まるような和訳を心がける。未知の単語もテーマをおさえられれば類推はより容易になる。文脈から判断するのである。京大特有の素材傾向----自然・人文を問わず、諸科学の「基礎づけ」を扱った内容と、やや深刻な内容の小説またはエッセー ----になるべく近い問題（一橋大・お茶の水大・大阪大などが参考になる）を捜して練習を重ねる。

② 英作文は基本例文の正確かつ豊富な暗唱が先決。その上でやはり過去問（後期も可）と他の国公立大の過去問を使って演習する。例えば「大挙して」「心の琴線に触れる」といった日本語の英訳として、暗唱した既習表現のどれで表現可能なのか。なるべく先生に添削してもらうとよい。

③ 単語集については東大と同様であり、殊更に難解な単語を覚える必要はない。むしろ一つの単語の文脈に相応しい訳語を日頃から堀り下げて考えることが大切。「分かってる」単語ほど辞書を引くこと。とはいえ予習の段階での未知の単語については、安易に辞書を引かず、文脈からその意味を類推する癖をつけたい。

□ 一橋大英語［前期］

一橋大の問題は素材の質としては京大に近いが、もう少し読み易い代りに分量が多く、設問も多様である。内容説明(要約)問題のまとめにくさが一つの特徴と言え、下線部の前後に留まらず、広範囲に目を通さなければならないものが多い。この内容説明問題の出来がカギとなるので、過去問を通じて解答の作り方を十分に研究しておきたい。

① 評論文は、英文自体としてはそれほど読みにくいものは出ない。過去問(後期も使える)の演習は勿論だが、市販の長文問題集も練習になる。

② 小説・エッセー系が出題された場合はけっこう本格的で、読みにくいものが多い。登場人物の心理の動きを、直接に心理を示す単語ではなくて行動から読み取って行くという現代文的な読み方が必要になる。

③ 100字前後レベルを含む説明問題の多さは一橋大の特徴の１つ。国公立大型の、 30字・60字・100字程度の標準的字数内の説明問題演習の必要がある。150字レベルの説明問題は、慶應義塾大文学部英語で演習できる。また、長文読解問題を150字以内でその趣旨をまとめる練習をすればよい。

④ 2000年度以降、和文英訳に代わって意見展開型の自由英作文(100語以上)が定着している。3つのテーマから1つを選ぶというスタイルだが、このテーマの選び方次第で書き易さが変わってくる。書き易いテーマの見極めが重要になってくる。手順としては
［Ⅰ］基本例文の暗記（正しく書ける英文のストックが必要）
［Ⅱ］自由英作文の添削指導（一橋大の過去問はもちろん、東京大・東北大といった、他大学の自由作文問題）
上記２つと併行して、長文読解問題や解釈問題・和文英訳の英文で、自由作文に利用できる英文がないか、常にアンテナを張って、使える文はノートに書き写すなどしてストックしていく。

⑤ リスニングの対策は東大に、単語集については東大・京大に準じる。

□ 東北大英語［前期］

東北大の問題は、東大・京大・一橋大と遜色のない難しい問題が出題される。大問Ⅲが毎年趣向を凝らしてくるので対策がとりにくいが、大問は４か５である。分量、語彙も歯ごたえのあるレベルではあるが《長期にわたる地道な努力がきちんと報われる》＝《得点に反映される》問題である。和訳・内容説明、英作文ともに、仕上げの精度でかなり差がつく。特に和訳は自然な日本語になっていない解答が一番困る。医学部を狙う人はかなりの高得点が求められる。

① 大問ⅠⅡの長文は、東北大の過去問（後期も使える）のみならず首都大、横国大などの過去問演習で対応可能。内容説明では問題文の利用に徹し、「自分の言葉」をさしはさまないこと。なお東北大の下線部和訳は難度の高い構文に下線を引くというのではなく、文の展開を読み取る上で重要な箇所に下線を引くという、きわめてまっとうな方針が見て取れる。前後をきちんと読めば、ヒントが見つかるし、それを読み損なうと思わぬ失点につながる。なお、大問Ⅱでは、本文の内容を踏まえての、自由作文や英語による要約問題が出題される。

② 大問Ⅲは「会話を含む文章の空所補充と内容一致問題」や、「英問英答と自由作文」、「英語による要旨まとめ」など、年度毎に変動する。

③ 大問Ⅳは、2006年以降、和文英訳が定着している。逐語的訳は避け、伝えたい内容を少し工夫して基本的な表現で書くようにする。的確な英語を書く力をつけることに尽きる。回答例の解説が詳しい問題集で練習するとよい。

④ 単語集については、標準的なものを一冊しっかり仕上げておく。

教科別学習ポイント　Japanese

国　語

★国語の基本

① 「答」はすべて「本文」にある！

国語の解答の基本は、「すべて本文にある！」ということである。

「答」も「ヒント」も「答の根拠」も本文にある！ということを認識し、見つけることが大切である。また、ヒントは「設問･選択肢･前書き･注」にも書かれている。入試の国語の得点を上げるということは、「書かれている答」をより速く･より正確に見つける･見分ける(＋まとめる)ということが鍵になる。

② 「書かれている答」を見抜く！

「答」を「見つける」ことは難しくはない。傍線部に含まれる語句と同じ語句を本文でチェックしてみよう。その周りに、答が「書かれている」ことがほとんどである。問題になるのは、見た目が違う場合、つまり、内容がほぼ同じなのに表現が違っていたりする場合である。たとえば、「顕在」と「可視」。この二つを同じ(言ってることは一緒) と見なすことが出来るかどうかがポイントになる。

センター試験をはじめとするマーク式の問題の正解はそのように作られている。あとは選択肢を比べて「もっとも適当なもの」を選ぶだけである。センターは、「本文と選択肢の対応」・「選択肢の吟味」で攻略できる。

もちろん記述式の問題でも「書かれている答」を本文から読み取り解答を作成すればよい。

現代文も古文も漢文も考え方は同じである。

★「予習」のポイントは次の３点

◇ point1 ◇ 「わからないこと」をはっきりさせるのが「予習」！

① 時間を設定して(たとえば25分)、テキストの問題を自力で解いてみよう。最終的には本番では時間との戦いになることが考えられるので、時間を意識することが必要である。

② 「この問題は自信がある」という設問には、ＯＫマーク(たとえば「○」)、「これは授業できちんと聞かねば」という設問に「？」等をつけよう。このチェックをしておくと、授業も復習も実のあるものになる。

③ その上で、調べられること･調べて解決できそうなことは調べ、色ペンでメモをする。

◇ point2 ◇ 「テキスト」には直接答を書き込まない！

できれば、本文はコピーをとるなどして、それに答および道筋を書き込もう。テキストに書き込んでよいのは、ＯＫマークのみ。答を書き込んでしまうと、復習に使えなくなる。

◇ point3 ◇ 「古典（古文･漢文)」は「音読」してこよう！

「体に覚えさせる」ことが大切である。

★「授業」は必ず予習をしてきて、メリハリをつけて受けよう

◇ point ◇ 「答」は消さない･塗りつぶさない･書き直さない！

① 自分の答と正解との距離を確認できるように、自分の書いた答は大切に残しておこう。消したり、塗りつぶしたりしていては、同じ過ちを繰り返すことになる。

② 「予習」ではっきりさせた「わからないこと」を解決するのが授業である。授業で解決しなかった場合は、どんどん質問に行って解決(納得)しよう。

③ 「ＯＫマーク」で正解だったら、「◎」「☆」にする。

★「復習」までのサイクルを早めに作ってしまおう

◇ point ◇ 「◎」や「☆」のない問題について辿り直そう！

① 答えの根拠を確認して選び直す。必要条件を押さえて、答えをまとめ直す。

② 現代文は、本文を要約してみよう。古文・漢文は、本文を音読しておこう。

★「語彙」がなくてははじまらない。

◇ point1 ◇ 面倒くさがらずに、辞典を引こう！

入試国語に欠かせないものは、「フィーリング」でも「センス」でもない。それらに頼っているうちは、国語の得点アップは望めない。必要なものは「語彙＝ことば」だ。先に挙げた「顕在」とか「可視」とか「表層」とかがわからないと正確に読むことは難しい。類推力も必要であるが、ある程度の言葉がストックされていないと、類推は不可能である。予習の段階では、わからない言葉をチェックし、復習の段階で辞典を引く、読む。語彙のストックができるまで、それを続けていこう。

◇ point2 ◇ 古文･漢文の基本は何度も繰り返して覚えよう

古語を覚えただけ･文法がわかるだけでは入試には対応できない。覚えたものを取り出す練習が必要である。しかし、入試はこれをマスターしていることが大前提になっている。覚えるべきものは、古文では「古今異義語」「文法」、漢文では「句法」「漢文重要語句」である。

何度も繰り返してとりくんでいこう。１回目はたいへんでも、２回目３回目はスピードもアップするし、定着も楽になる。１回学習しただけでは覚えられないのが人間である。３回繰り返したら効果はかなり上がる。語源を押さえるのがコツである。

★まとめ

◇ point ◇ 言葉･日本語の仕組み･論理展開の基本を頭に入れておこう！

☆ 言葉を選んで文章は書かれている

☆ 言葉の繰り返しを嫌う→　逆に言うと繰り返しているところは「意図的に」同じ言葉が用いられている。

☆ 日本語の基本形は「ＡはＢである」

☆ 論の進め方は、「繰り返し」＆「対比･逆接」

☆ 「設問」のスタートは「傍線部」分析

小 論 文

★小論文の基本

① 小論文とは？

自分の考えを述べるものである。とはいっても、入試の小論文ではほとんどが課題文つきで、この課題文の読解を通じて、自分の意見を見つけていく作業が重要となる。だから「筆者と対話」するという要素が含まれる。課題文を読んだ上で、自分の問いを立て（テーマを設定)、論証し、その答を述べる（結論）ことが小論文と言える。

② 小論文の材料

自分の考えを補強するために、知識も欠かせない。その知識は、国語の学習のなかでも身につけられるし、理科や地歴公民の知識を応用することもできる。また、時事的な知識は新聞･ニュースなどから取り入れる。

③ 実際に書いてみること。これが小論文上達の近道である。

□ センター試験対策

センター試験に出題される問題は、難解でとても受験生には理解できない、というようなものではない。６割（120点）がセンター試験の目安とする平均点であり、標準的な試験であるといえる。だが、80分という「限られた時間で、早く、正確に、解答にたどり着くための読解」ができなければ得点には結びつかない。じっくり味わいながら読むことよりも、書かれている内容（＝答）を素早く判断し、見抜く力が要求されているのである。この点をまずは頭に入れて、センター試験対策に取りかかる必要がある。

「国語表現」はコミュニケーション力(＝表現力)を重視し、話す･聞く･書くなどの表現力を強化することを目的とした科目だが、これらの技能をマーク式の試験で測るのは難しく、「表現の特徴」として正しいものを選択させるという出題が続くだろう。

① 分野別学習対策

第１問【評論】

現代文のポイントは「全体把握」と「部分把握」である。これは小説でも同じだが、特に評論において意識して欲しいことである。問題文全体の論の展開を把握し、設問文をしっかり読んだ上で選択肢を検討しなければならず、「全体把握」は重要である。また、傍線部を中心とした「部分把握」によって、傍線部＝選択肢＝本文の対応を見抜く事ができる。最近のセンター国語は時間との戦い、という面が避けて通れなくなっている。同じ「解ける」にしても、「より速く」「より正確に」ということが要求されている。それを実現するには、とにかく訓練が大切である。特に評論は、的確な読みと解法を知ることによって、速度も得点もアップする。

第２問【小説】

小説は雰囲気だけで読んでしまいがちだが、主観を排除して客観的に把握することで、正確な読み取りが可能となる。古い時代の文章などでは、背景も馴染みが薄く戸惑う受験生も多いが、そのような出題も近年続いているので注意が必要である。

第３問【古文】

読解力･得点力の基盤が「文法」と「古語」であることはいうまでもない。文法などの基本知識を押さえ、いわゆる重要古語も400～500語程度マスターすれば、得点に繋げていくことができる。和歌も含め、基本知識に基づいて丁寧に読解していく力を磨くことが大事である。

第４問【漢文】

「漢文は簡文」といわれるように、省略が多く、簡潔に表現されている。また、少ない労力で確実に得点できる分野である。句法や語句を勉強したかしないかによって差がついているだけなので、ここは重点的に取り組むとよい。漢文で50点満点を狙うことがトータルでの高得点に繋がる。

② 目標得点別学習プラン

○ 平均点をクリアする。（目標点 120～140点）

現代文は、漢字の書き取りなどで確実に取れるようにし、無駄な失点をしないようにする。漢字練習帳･問題集を利用して漢字力・語彙力の充実を図ろう。古文は、重要古語（400～500語）の語義と文法の基礎について総点検。漢文は返り点にそって訓読できるようにしよう。漢文は読めれば確実に得点につながっていく。音読を繰り返し、身体で覚え、その上で重要句法についての知識を確実にする。

○ ８割を目指す。（目標点 150～160点）

古文・漢文は、現代文に比べて学習効果が高い。いずれも満点を狙える。ここを確実に押さえて得点を稼ぐ。

○ 満点に近づく。（目標点 180点以上）

現代文はかなりの長文で、しかも短時間で解答しなければならないため、選択のポイントをしっかり押さえて解答することが必要である。180点以上目指すなら、現代文の攻略が鍵となる。

③ 対策

大手予備校各社からセンター試験問題集が出版されているが、まずは自分に合うと思えるもの、解説をすんなりうけ入れやすいものから始めるとよい。自信がついたら自分にとって難しいものに取りくみ、センター試験が近くなったらまた自信のあるものをこなすとよいだろう。それは、各社毎に微妙なクセがあるためだ。過去問は一年を通してコンスタントに解いていくようにしよう。一般的に、青本はセンター試験より難しめであり、センター試験直前に取り組むと点の取れなさに失望する可能性がある。黒本は標準的な問題で揃えてある。解説は詳しい。白本は模擬試験での設問別･現浪別･予想得点などのデータもついているので、自分がどの位置なのかがわかる。

いずれも問題を解くことよりも、解説をよく読み、次に生かすことが重要である。点数だけを気にするのではなく、解法を身につけることを主眼とした練習を積み重ねて欲しい。

□ 難関国公立大二次対策

国立大記述問題

センターでは読解の後は比べるという作業であったが、二次で求められるのは理解したことを表現する力である。ポイントが入っている、と採点者がわかる答案を目指そう。国語の場合は「捨て問」は少ない。全て答えを作り、部分点で稼ぎつつ、得点を積み上げよう。

個別の大学について

東京大： 東京大の問題は１問ずつとりくむと「難解でとても解けない」という問題ではない。だが記述量が多く要求度も高い。ストレートに攻めてくるが、かなりのスピードが要求される。文章を正確に読みこなす読解力と、解答に入れるべきポイントをわかりやすくかつ簡潔に記述する表現力が必要とされる。

京都大： 現代文は、文章の主題や筆者の主張を本文全体から的確に把握するとともに、個々の文脈を正確に押さえることが必要である。古文は現代語訳を中心に出題される。2008･2009と和歌を含まない文章が出題されたが、2010には和歌解釈は復活した。2012は文系のみ出題された。2013年度はなし。しかし、定番の問題と考えて、学習しておかねばならない。

一橋大： 一橋大の特色は200字程度の要約問題を課す点である。全体の流れをふまえてまとめられるように練習しておきたい。大問[２]出典は明治期のものも多い。過去問を使って練習しておくとよい。2009～2011は文語文の出題であるが、2012年は、2008年以来４年ぶりに古文が出題された。2013年･2014年は文語文であった。2016年は11年ぶりに現古融合文が出題された。

東北大： 二次試験としては、受験生の力が量れる良問揃いである。現代文の記述問題は字数制限がある。40～80字の中に過不足なく解答のポイントが入るように練習したい。古文漢文は説明問題が中心である。小説の難易度が高い。高得点を狙うなら、小説が鍵となる。2014年は2001年以来13年ぶりに随筆が出題された。

数　学

□ 学習コンセプト

○ 教科書の徹底理解を！
・《予習→授業→復習》が鉄則。
・教科書の内容をきっちり記憶･理解すること。記述の答案作成に使える技術は公式･定理そのものより、説明や証明の部分に含まれている。

○ 絶対的な演習量の確保を！
・難関大突破のための演習量は、標準レベル以上の問題を、最低でもセンター用 200～300題、二次試験用300～400題である。少しの演習量で一時的に成績が上がる人もいるが、その後低迷することが多いので、上記の問題数は絶対にこなす努力をすること。
・センター試験の過去問や志望校の赤本による演習、模擬試験の解き直しなども効果的。

○ 予習
・予習は「問題を読み、自分なりに考える」ことであり、また授業の理解を深めるために行うものである。１題15～20分程度の時間を設定して、必ず取り組むことが大切。
・論理的な思考を優先し、自分なりの解答が得られるまで予習する。完全に解けなくても、自分の思考過程や疑問点･問題点をメモして授業に臨むこと。

○授業
・先生がどのように問題をとらえ、どのような思考過程を経て結論に至るのかを知ることに集中する。また予習時の疑問を解決･理解することに努める。

○復習
・今まで習得した知識の習得と定着が重要である。ノートの読み直しではなく、必ず解き直しをする。また自信のない問題や理解の浅い問題は最低３回は復習すること。
・比較的易しい問題を軽く見る人が多いが、それを早く正確に解けるかどうかが大切。また別解を考えてみることも必要。

○数学は積み重ねが大切で時間のかかる教科
・数学は厳密な科目だからといって、完璧な答案を作ろうとする人が多いが挫折のもと。もっと気楽に継続できる学習をするように心掛ける。
・問題の解法は代表的なものを確実にマスターすること。丸暗記では実力がつかない。
・問題集は問題数が多いだけのものは避け、薄くても解答･解法の詳しいものを使う。またそれを２回･３回繰り返すと効果的。
・解けない問題を難しいと言ってチャレンジしないのはもったいない。自分の知らない新しい知識･考え方を提供してくれる飛躍のチャンスと前向きに捉え、挑戦しよう。

□ センター試験対策

・センター試験は決して易しくない。時間の割に内容や計算量にボリュームがあり、また最近は数ⅡＢを中心に二次試験レベルのものも出されるようになってきている。
・大問１問当たりの解答時間は10～15分前後である。当面は解答の速度と正確さを高めていくことが最優先課題である。まずは過去問やマーク模試の問題などで時間配分のシミュレーションを行っておく。また試験では１つの計算ミスが大量失点に繋がるが、それを見直している余裕はないので、計算は慎重に行うこと。
・図をフリーハンドで正確に書く練習をすること。図から答えが導けることもある。
・途中経過を問われないマーク形式の試験であるから、記述形式にはない独特の解法やテクニックが存在する。しかし当面の学習ではテクニックに頼らず、誘導に乗って、正攻法で考えることが大切。また演習時には、解答の方針をメモするなどして復習に役立てる。
・数学ＩＡと数学ⅡＢでは、ⅡＢの方が平均点が低いことが多いが2010年、2013年などはＩＡの方が難しかった。ボリュームのあるⅡＢはもちろんだが、ＩＡも侮ってはいけない。
・二次の標準レベルでの演習をつむことが、対策にもつながる。

□ 国公立大の答案作成

○ 大学ごとの出題傾向を把握する。
東京大：融合・総合問題で全体的に計算量が多い。図形問題多かったが、最近は解析系の問題増加。柔軟な発想力必要。定型問題増加。
京都大：論証力が問われる。融合・総合問題で全体的に計算量が多い。図形問題も多く、着想・発想力必要だが、以前に比べると解きやすい。。
東工大：答案作成の構想力必要。解析系の問題が多く計算量も多い。
一橋大：整数、微積、確率、ベクトルと出る分野がほぼ固定しているが、文系としては難問が多い。
東北大：確率が頻出分野であるが、出題分野は年により偏りがある。受験生は全分野満遍なく対策すべきである。文理とも標準問題をしっかり得点できれば、合格者平均点に達するであろう。

○ 答案添削
入試では「方針→立式→計算」の各パーツ毎に採点されるが、独善的な答案では得点にならない。この完成度のチェックは先生に添削･指導してもらうのが最良である。

理　科

□ 学習コンセプト

「基礎」にこだわりすぎて、教科書の章末問題や演習問題集の基礎確認レベル程度の問題ばかりやっていても受験に必要な入試学力はついてこない。基礎事項を確認できたら、どんどん標準問題（ただし良問）にチャレンジしよう！　問題がいろいろなことを、気づかせ、教えてくれる。また当然のことではあるが、難関大学で出題される問題文のボリュームからみても、それを速く、正確に読み込む日本語読解力の重要性は言うまでもない。

◇ 物理

化学･生物と比べると確かに覚えなければいけないことは少ないのだが、それを覚えたからといって、即得点に結びつく科目ではない。頼りになる「公式」も、それをじっくり考え、理解し、実際に使いこなしてこそ、はじめて得点への原動力となる。さらに「公式」を原理･原則から理解するためには、ベクトル･微分積分の数学的知識・考え方も不可欠である。（出題者側が「微積を使って解け」は禁じ手であるが、受験生が微積を使って解くことは問題な

いということを意識してのことなのか、超難関大学では、微積を使って解くことを前提としているような問題もある）

ただ難しい問題をやればいいのではなく、“良問“と呼ばれる問題をじっくり考え、解くことによって本物の力がついていく。難関大学へのチャレンジでは、実際の試験会場で今まで見たことのない問題を基本に戻ってゼロから考え、解いていくというような時間はない。少しでも速く高得点となる答案を作成するためには、日頃から数多くの類題を解いて、物理的センスを養っておく必要がある。

◇ 化学

「物体」を学ぶ物理とはちがい、「物質」を学ぶ化学の場合、電子配置･化学結合など物質の内部を、また気体の圧力･温度･体積などをイメージできる「ミクロの視点」をもつことがまずは大切なこと。

化学３分野（理論･無機･有機）の中で何と言っても化学上達の鍵をにぎっているのは「理論」であり、理論計算問題の克服こそが、化学攻略の最大のポイントである。この計算問題の本質をみてみると、決してベクトルや微積といった数学的なものではなく、その殆どが比例式による解法という、所謂算数的（四則演算）なものである。そして問題解法のために重要となってくるのが、「単位」の認識である。密度（g/cm）･モル濃度（mol/ﾘｯﾄﾙ）･生成熱（KJ/mol）･ファラデー定数（C/mol）等、問題文に記述されている用語の定義（意味）を確実に理解していない限り問題を解くことはできない。

また理論化学の計算問題の場合、易しい問題にはこの解法、難しい問題にはこの解法という複数の解法パターンを覚えるのではなく、基本的には問題の難易度に関係なく、気体･溶解度･熱化学･･･といったテーマ毎に一貫した解法で問題を解けるようにするのがベストである（その方がミスも少ない）。

難関大学へのチャレンジでは、特に理論分野で出題される複数のテーマが混在した問題（例えばヘンリーと蒸気圧）や有機分野で出題される思考的長編問題対策として過去問･類題演習によって、集中力･読解力･計算力･記述力の強化を図っておく必要がある。

◇ 生物

物理･化学と比較すると圧倒的に暗記量の多い科目（計算問題はほとんど遺伝分野からだけ）であるため、各項目を有機的･体系的に結びつけて整理しながら効率よく覚えていく必要がある。

生物の場合、出題される問題の全てが、必ずしも高校の教科書からの出題とは限らず、教科書以外からの出題（難問が多い）が増えているため、志望校の過去３年分の問題をチェックし頻度や配点を調べるなど出題傾向を把握し、類題（標準～やや難）を多く解き、応用力･考察力･論述力をつけることが大切である。

難関大学の場合、これは小論文の問題か？と思わせるような超長編問題（B5版で5～6ページ位）も出題されるため、相当の集中力と読解力が要求される。さらに生物に多い記述問題対策としては、小論文同様、字数制限･誤字に注意するだけではなく、全体として日本文になっているか、文章の中にキーとなる用語が書かれているか、がポイントとなってくる。特にキーとなる用語は、専門用語であるため誤字は間違いなく減点の対象となるので注意が必要だ。

地理歴史・公民

○ 地理歴史･公民を学習するにあたって

特に地理歴史については範囲が膨大なので、なるべく授業で覚えるようにしたい。そのためにも予習段階で基本用語や時代･地図などは確認しておく必要がある。授業で大量に配られるプリントの穴埋めも、単に作業にしてしまっては意味がない。

実際のセンター試験の問題を過去何年分か解いてみると分かるが、出る用語等はかなり限られている。二次試験で地理歴史･公民を使うという人はそう多くはないはず。センター試験に特化した問題集や用語集などで重要語句をチェックし、整理すること。

一方、二次や私大受験でも使うという場合、大学によって出題形式が大きく異なる。早めに過去問にあたり、どういった対策を取ったらよいか、検討しておこう。先生と相談してアドバイスをもらうのが良い。

○ ひととおり勉強が進んでいくと･･･

単元ごとには理解できていたはずなのに、模試では間違ってしまうということが多くある。それは用語や項目が多いので、勉強が進むうちに混同してしまうからだ。

こういった問題は、教科書を順に何度も読み返しても、対策にはならない。自分なりにノートにまとめるか、資料集の比較表などを使って覚えてしまおう。

実際の試験問題では、時代･分野･地域など幅広く出題されている。ヤマはかけられない。苦手な時代や分野･項目を勉強し残さないよう注意しよう。

また地理歴史･公民とも時代･分野が複数にまたがるような出題が増えてきている。例えば、世界史では諸地域の接触と交流、周辺史。日本史では文化史が絡むような問題。地理では地域比較など、教科書の項目を習得した上で、問題演習を十分にこなして、対応出来るようにしなければ高得点は望めない。

地図や統計、図表の読みとり問題は、地理歴史･公民ともに最近よく問われている。とかく暗記科目と言われる地歴公民ではあるが、暗記型から、資料を読み取る能力、さらには思考力を要求される傾向にある。となれば問題文や資料にヒントが含まれている可能性も高い。諦めずに問題をよく読み、よく考えよう。公民は日頃からニュースや新聞に目を通しておくことも大事だ。

◇ 出題分野・パターンが大学によって、かなり明確に分析できる。
・短期集中型（１～２か月）で、志望大学の出題パターンを習得すること。
・各分野の基礎知識は、３冊程度、同じタイプの問題集をやってみると効果が大きい。（市販の問題集は６～７割程度が同じパターンで構成されている。３冊で３回の復習に匹敵する。）
・夏休みなど長めの休み期間を利用して、学習していない分野を「先取り」学習してしまうのも、地歴･公民を得意科目にするための有効な手段となる。

◇ 国立二次試験は「穴埋め完成式問題＋200字程度論述問題」が、半々くらいの比率で出題されることが多い。まずは特有の用語の定義･説明を50～100字程度で書く訓練をすること。

「用語説明」ができるようになったら、模試･過去問題演習を通して、より高度な論述力を身につけるようにする。自分の作成した答は、必ず先生に添削してもらうこと。それが、減点されない答案作成力をつける上で、一番大切なことである。